

# 信仰と実践

FAITH AND PRACTICE

<http://faith.reformed.jp>

2007年8月3日 第7号 第2版 編集・発行 関口 康

〒270-0021 千葉県松戸市小金原7-20-8 ysekiguchi@nifty.com

## 翻 訳

A. A. ファン・ルーラー

### 「ウルトラ改革派とリベラル派」<sup>1</sup>

#### (連載第5回)

関口 康訳

#### 4、罪に市民権を与えて当然視すること<sup>2</sup>

次にわれわれは、もう一つの轍(わだち)のほうへと話題を移すことにする。その轍とは、ウルトラ改革派の人々がそこを率先して歩き、また、そこでいつも決まって足を滑らせるところである。そこは滑りやすい粘土でできた地面なのである。私が思い描いているのは、彼らが罪深い人間存在という点ばかりをやたらと語りたがる、あのやり方である。

ウルトラ改革派の人々があれほど熱心に〔ハイデルベルク信仰問答の〕「人間の悲惨さについて」の部分に取り組むこと、そして彼らが辛うじて「人間の救いについて」の部分までは語るが、「感謝について」の部分については全く語らないことを指して、本来の意味での異端と呼ぶことはできない<sup>3</sup>。そのように呼ぶのはもっと誤りである。

<sup>1</sup> A. A. van Ruler, *Ultra-gereformeerden en vrijzinnig* (1970), in: *Theologisch werk* (Th. W.), Deel 3, G. F. Callenbach N. V. ?Nijkerk, 1971, p.98-163.

<sup>2</sup> 原文は *naturalisering van de zonde* (naturalization of sin) である。同じ語を「罪に市民権を与えること」や「罪の当然視」などといろいろ訳してみた。訳語選定に際して、以下の方々からアイデアをいただきました。心より感謝いたします。「国籍取得」：梅澤義信様(アムステルダム在住)、「当然視」：梅澤慎一様(兵庫県在住)。

<sup>3</sup> 原文は「悲惨の認識の部分」・「救いの部分」・「感謝の部分」となっている。これは、オランダ改革派教会の信仰規準であるハイデルベルク信仰問答の「第一部 人間の悲惨さについて」・「第二部 人間の救いについて」・「第三部 感謝について」を指している(吉田隆訳『ハイデルベルク信仰問答』新教出版社、1997年を参照)。

彼らはものすごく真剣である。われわれが自分の罪を学び知るのは、福音を学び知るよりも前（voor）なのか、それとも福音を学び知ることによって（door）なのかという論争点をまだ考慮に加えていないのは、そのこととわれわれが罪の中にいつまでも留まり続けることとは無関係だからである。われわれはまるで罪の中に留まり続けるために教会の礼拝に集まっているかのようである！われわれはまるでそのために教会に参加し、キリスト者になったかのようである！しかしわれわれはキリストについても聴きたいと思うし、キリストによって成し遂げられたみわざについても聴きたいと思うし、そのみわざにおいて成就された救いについても聴きたいと思う。けれども、それだからといって感謝の部分が全くなおざりにされてよいわけではない。感謝は、神の子の心の内なる喜びという点だけに限定されてはならない。あらゆる日常的な存在が 家畜市場に至るまで 神への賛美礼拝にならなければならないのである。われわれは実践的キリスト教というものに自己限定すべきではないだろう。しかし、キリスト教は実践的でなければならないのである。

まさにこの点が致命的に不足していることが、その人がウルトラ改革派であることを示している。リベラル派は間違いなく反対側に立っている。リベラル派はしばしば、事柄を実践的キリスト教というようなものの中に吸収させてしまう。彼らは 彼らの大胆不敵さを神は許しておられるのだが 福音（キリスト！）がこの世界の中で「立証」されることを求める。彼らは、キリストにある救いを携えてさまざまな手を尽くすというようなことを、あまりしたがない。そして彼らは、罪深い人間存在についての話を聞くことを嫌がる。この最後の点がいっそう注目すべき点である。なぜなら、キリスト教的な罪の教理は、世界における悪の問題に決着をつけるために最も楽天的なやり方だからである。この点でリベラル派はいつも悲劇的生活感覚の深淵の中に転がり落ちていくところに立つ。この点ではウルトラ改革派のほうが健全であり、またより楽観主義的である。ウルトラ改革派は、罪深い人間存在という点をしっかりと握る。彼らは他の立場に立つこと、たとえば、創造の諸構造の中に悪の諸起源を見つけ出すというようなことなどは、一瞬たりとも脳裏によぎらすことがないのである。

しかし、彼らは、罪深い人間存在についてどのように語るのだろうか。私がそれを語るときには、この事柄についての考え方や語り方の全体が、われわれは自分の罪と過ちにおいて「死んでいる」という、使徒のイメージによって規定されている。このイメージがウルトラ改革派の手に握られている。一人の罪人は、死せる人間である。死せる人間とは死体のことである。死体は、腐るために置かれることができるだけである。人間は、主の鼻の穴の中の悪臭である。そのようなものとして彼は生まれた。そこにあるのは罪の共同性と生来性、すなわち、〔アダムとエバの〕墮落（zondeval）と〔アダムから受け継いだ〕原罪（erfzonde）である。そこに初めからあるのは死臭のみである。人生と世界のうちに漂う死臭のみである。

私見によると、使徒のイメージをまさにこのようなものとして描き出すことこそが、われわれを異端の道へと導くやり方である。罪深い人間存在が有しているのは、死体それ自体の受動性なのだろうか。罪は、死と同じような意味での定めとしての性格を持っているのだろうか。罪とは行為ではないのだろうか。私は、罪は個別の間違った行為という意味での悪行 (zonden) から構成されている、と言おうとしているわけではない。たしかに罪は、そのようなものによっても構成されている。しかし、罪深い行為の中に、またそのような行為の背後に、罪それ自体があり、罪深い性質があり、墮落した本性がある。しかし、そうであっても、われわれは、もし純粋な正統主義の立場に留まりたいのであれば、何度も最後まで突き詰めなければならない。最終的に問題になるのは一つの行為でも複数の行為でもない。性質や本性でさえ問題ではない。問題は、その行為の行為者 (dader) である。それゆえに、人間は罪人そのものなのである！

そのように語っているときにわれわれは、罪と過ちにおける「死」と名づけられたイメージをたしかに抱いている。ところが、実際のわれわれは、元気に生きている。生物学的な意味で元気に生きているだけでなく、霊的な意味でも元気に生きている。われわれは、神との関係において元気に生きている。そこでいつも問題になることは、われわれが神とこの方の御心に反して生きているということである。われわれは永久に神と闘い続ける。罪深い人間存在は、純粋に行為性 (actuositeit) によって構成されている。罪とは一つの行為であり、すべての行為である。それはまた純粋に悪意性 (moedwilligheid) においてさえ存在する。使徒は死体の話をしているのではない。彼がたしかに語っていることは、われわれは弱い者であったということであり、それゆえにこそ、われわれは神なき者であったということであり、それゆえにこそ、われわれは神の敵でさえあったということであり、そして、それゆえにこそ、われわれは和解され、義と認められた者なのである、ということである。

われわれは、罪からこの生命性 (levendigheid) すなわち、この行為性と悪意性を抜き取るべきではない。なぜなら、それらを抜き取る時に、われわれは罪に市民権を与えることになるからである。言うならば、そのときわれわれは罪深い人間存在に市民権を与えて当然視するような思想を持っているのである。そのとき罪は神の定めにおいて与えられたものとして理解され、体験される。しかも、われわれはその理解と体験に至るまで、いつも同じような仕方で待つことができるだけではない。もし罪が神の定めにおいて与えられたものであるというならば、再び繰り返すものにもなる。こうしてわれわれは 純粋に受動的に 地上性 (wereldling) から天上性 (hemelling) へと移し替えられてしまう。墮落 (zondeval) と原罪 (erfzonde) を当然視する思想に対して、いくぶん宿命論的な選り好みをもった概念をもって答えているのである。

それに対してわれわれは、純粋な正統主義の教理を十分な説得力をもって持ち出す

ことはできない。この場合の純粋な正統主義の教理とは、罪とは〔アダム自身が犯した〕原罪(oerzonde)という意味での墮落(zondeval)の形態においても、また〔アダムの罪の結果生まれた〕共同性の意味での原罪(erfzonde)の形態においても咎(とが、schuld)である、というものである。われわれは、その行為の行為者であるという意味での「罪人」であり、そうであり続けている。われわれは、咎ある者として生まれた。そして、われわれがしなければならない唯一のことは、自分自身の罪人としての定めを憎み悲しむのではなく、自分自身の咎を告白することである。罪深い人間存在という点もまた、一つの信仰個条である。人間は罪深い存在であるということがわれわれに対して、御言葉の奉仕の中で職務的に告知される。われわれはそのことを、「すべての聖徒たちと共に」告白することができるだけである。各個人は、遠くから、おぼろげに、そこから自分自身の場合はどうなのだろうかと推測することができるだけである。それが意味することは、職務的な意味で「仲保者を通して(over)」語られたということであり、あるいはまた信仰告白的・リタージュ的な意味で「仲保者によって(door)」語られたということである。仲保者は、罪によって神の御前から失われた者の状態(verlorenheid)を徹底的に味わい尽くされた。仲保者の体としての教会は、この悲惨の認識を、仲保者と分かち合う。各個人は、繰り返し教会のこの認識において、自分の出番において、この体にメンバーとして参加するのである。

ところが、ここに問題がある。彼らはなんと、咎(schuld)を告白しているときに、罪(zonde)を憎み悲しんでいないのである！われわれは罪の真理に関する滑りやすい道の上で足を滑らせるだけではない。われわれが罪というものに市民権を与えてそれが当然起こるものであるかのようにするように考えたり語ったりするや否や、一切はちょうど正反対のほうに向いてしまうことになるのである。正統の反対が異端である。ここでわれわれは、より右翼的であることは右翼よりも右側ではない、という命題は全く明白な真理であるということに再び気づかされる。われわれが罪について「重く」語ることがありうるということは、われわれがもはや罪については全く語らないこととは全く別の話なのである。

罪に市民権を与えて当然視する異端は、ウルトラ改革派だけに責めを負わせてよいものだろうか。彼らの場合、この異端は、きわめて明白に露見される。しかし、それによって生じうることは、彼らが罪について驚くほどたくさん語ることである。すべての改革派プロテスタンティズムは、多少なりともこの異端の悪しき影響に冒されているのではないだろうか。ローマ・カトリック教会と東方正教会についてこの関連で語るべきことは、われわれにはほとんどない。彼らは本当に不可議に思うほど、罪深い人間存在という点をほとんど全く考えていないからである。ルター派の事情は、おそらくいくらかましである。彼らの主張する律法と福音の永遠の弁証法、すなわち、裁きと恵みの永遠の弁証法は、くらくらと目が回るようなものではあるだろうけれど

も。しかしわれわれは、改革派プロテスタンティズムが罪について純粋に語っていることを まさにそれが語るとおりに 正しく聞いているだろうか。咎としての罪は、なんらかの意味で“被造物の荣誉”と呼ばれるものでもある（創造者は、無から何ものか、すなわち“悪”をも創造することがおできになる方である）というふうに理解することまでもが正しいのだろうか。われわれは罪を咎として告白する。罪ある者がこの一事をなすとき、救いの陽光はすでにのぼり始めているのだというこの点に一切の命運を賭けてしまうようなやり方がはたして本当に正しいのだろうか。実際には、すべての改革派プロテスタンティズムが、ウルトラ改革派が教える「われわれが罪を犯すのは当然である」というような異端的な罪意識によって侵食されているのではないだろうか。

罪について純粋に正統主義的に語ることは、最大級に難しいことでもある。しかしわれわれは、悲劇的生活感覚の絶望によって打ち倒される恐れのある、この現代社会に生きている。そのわれわれが、「創造に関する信仰個条は、現代の状況の中では、罪に関する信仰個条よりも重要である」と語るべきであったかどうかを問いなおす必要などは全く無用なのである。

（次号に続く）

### 「ファン・ルーラー研究会」からのお知らせ

「ファン・ルーラー研究会」は、会員募集中です。ぜひご参加ください。詳しくは、ホームページ(<http://vanruler.protestant.jp>)を御覧ください。入会希望・意見・質問等は [ysekiguchi@nifty.com](mailto:ysekiguchi@nifty.com) (関口 康)までお寄せください。

### 「アジア・カルヴァン学会」からのお知らせ

「アジア・カルヴァン学会」は会員を募集中です。ぜひともご参加くださいますよう、お願いいたします。詳しくは、学会公式ホームページ(<http://society.protestant.jp>)を御覧ください。また入会希望・意見・質問等は [Sno2999@aol.com](mailto:Sno2999@aol.com) (野村 信)までお寄せください。